平成30年度大規模地震時医療活動訓練に統括 DMAT として参加しました（2018/8/4）

テーマ：南海トラフ地震、大規模地震時医療活動、DMAT、搬送調整
場所：福岡空港（福岡県福岡市）、大分県立病院（大分県大分市）

2018 年８月４日(土)、平成 30 年度大規模地震時医療活動訓練が徳島、香川、高知、大分、宮崎各県で実施され、佐々木宏之助教（災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野）が東北大学病院 DMAT チーム２のリーダーとして大分県での訓練に参加しました。

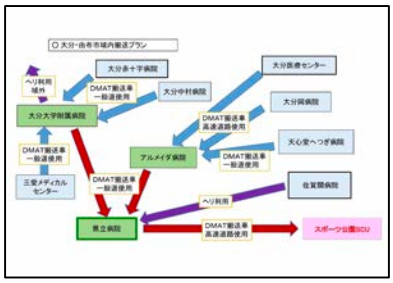
大規模地震時医療活動訓練は政府による総合防災訓練の一環で、南海トラフ地震を想定し、大規模地震時医療活動に関する総合的な実動訓練を実施して、組織体制の機能と実効性に関する検証を行い、防災関係機関相互の協力の円滑化を図るものです。本年度は上記５県（愛媛県は平成 30 年 7 月豪雨の影響により不参加）が被災した想定のもと、内閣官房、内閣府、警察庁、消防庁、厚生労働省、国土交通省、防衛省などの政府機関や、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、西日本・本四連絡高速道路株式会社、関係各道県、その他の民間団体などが訓練に参加しました。医療機関は５県合計で 139 病院、DMAT は訓練プレーヤーとして 355 病院、374 チーム、1846 名、コントローラーとして 378 名が参加しました。

DMAT は大規模災害が発生すると、陸路・空路（原則陸路）で指定された参集拠点本部に集まります。遠隔地である東北のチームは指示通り福岡空港へ空路で参集し、そこで大分県の大分市・由布市活動拠点本部（大分県立病院）の指揮下で活動するように指示を受けました。この指示は当日に初めて知らされます。現地までの移動も訓練の一環で、現地本部の手配したレンタカーで２時間かけ大分県に移動し、大分市・由布市活動拠点本部にチェックインしました。２チーム派遣の東北大学病院 DMAT は１チームが被災・孤立した佐賀関病院の病院支援に、１チームが活動拠点本部活動をサポートするよう指示を受け、チーム毎に分かれて活動を開始しました。

佐々木助教のチームは本部活動サポートの指示を受け、メンバーを搬送調整（何人の傷病者をどのような方法でどこに搬送するのか）、通信、クロノロ記載サポートに分けて活動を開始しました。大分市沿岸部では津波によって複数の病院が浸水被災し数百人規模の病院避難が必要となっていました。エリア内での搬送プランに沿って、どの病院へどの程度の搬送資源（救急車、ヘリなど）を配分するか、現地担当医師とともに作戦を立案し、関係機関に連絡、実施へと導きました。本部レベルではこの「資源配分・調整」が主要業務となり、実際の運用は現場レベルに任せます。災害医療の現場では常に「搬送」がボトルネックとなるため、佐々木助教らは効率的な資源配分、域外搬送、あらゆる搬送手段の動員（医療・一般タクシー、大型バスなど）、搬送者数抑制のための籠城支援・物資搬送など、防ぎえた災害死を少なくするために検討を重ねました。

大分市・由布市活動拠点本部（大分県立病院）会議の様子

地図をみながら搬送計画について討議する佐々木助教



本部長の提示した大分市・由布市域内搬送プラン

文責：佐々木宏之（災害医学研究部門）